

リュトブフの仮構された「私」によるパリ

高名 康文

1. なぜリュトブフか？

12、13世紀フランスの俗語文学作品におけるパリというテーマを考えてみる。すると、パリが作品の中に出てくる例をほとんど思いつかないことに驚く。この時代においては、コンスタンチノーブルやバビロンは、遠い豊かな場所として、イェルサレムは巡礼の土地として、ローマは古代の都、あるいは、聖職者批判の文脈の中では金銭に関わる不正の横行する場所として、また、サレルノやモンプリエは医学が発展した土地として、すでに文学的なトポスを形成していた。それに対して、パリは、事実において政治と学問の中心地としての地位を確立しており、ラテン語文学ではアベラールの「とうとうパリにやってきました。¹」という言葉があるのにもかかわらず、俗語文学においては不思議なことに「学問の都パリ」というような決まり文句が出てくる例が思い浮かばない。都市の文学とされるファブリオーの中でもパリが舞台になるということは、ほとんどなく、むしろ、プロヴァンやコンピエーニュといった土地の名前が真っ先に思い出される。

都市における集団での文学活動といえ、13世紀はパリよりはアラスである。パリで活躍した詩人というと、ヴィヨンは15世紀を待たなくてはならない。ジャン・ド・マンが『薔薇物語』後篇で、寓意人物の「みせかけ」を通して、パリ大学での在俗聖職者と托鉢修道会の紛争を諷刺したが、物語の舞台は、主人公の「私」の見た夢である。13世紀に、パリでの暮らしを作品で語った詩人といえ、リュトブフぐらいしか思いつかない。これは、私の知識の問題のせいだけでもないらしく、アルマン・ストリュベルが、リュトブフの作品における都市について論じた論文の冒頭でも同様のことを述べている²。また、アラン・コルベラーリも、詩のジャンルとしての« dit » (物語詩)

¹ アベラールとエロイズ、『愛の往復書簡』、岩波文庫、2009、p. 8、(杵掛良彦・横山安由美訳)より引用。引用部に付せられた訳注 (p. 222)によると、アベラールがパリにやってきた1100年当時のパリは人口3000人程度の小邑に過ぎなかったという理由から、この記述に時代錯誤を認めて、この書簡が偽作だという説の根拠とする者もいるということである。

² Armand Strubel, « Le Poète, le jongleur et la ville : la thématique urbaine dans la poésie de Rutebeuf », *Memini*, 2007, pp. 5-22.

を論じた著作に、13世紀の俗語作品におけるパリの不在を問題にして、「パリの登場」(L'Émergence de Paris)と題した章をおいている³。

2. リュトブフの作品と校訂本について

リュトブフは、1248年から1277年頃に活躍した詩人である。ごく初期と推定される作品「フランシスコ会士の物語詩」(Le Dit des Cordliers)の中で、シャンパーニュ地方のフランシスコ会修道士たちを賛美していることから、この地方の出身ではないかと言われている。おそらくは学生としてパリに出て、その後、身をもちくずして詩人兼旅芸人として活動したということが作品から読み取れるが、そのようなことを証明する客観的な資料は一切存在しない。

現在参照されているリュトブフの作品の校訂本には、ファラルとバスタンによるものと、ザンクによるものがある。

ファラルとバスタンによる1959年の版は、それまでのリュトブフの作品の文献学的研究の集大成となっていて、作品の歴史的背景、ラテン語と俗語の源泉、語彙および語学的特徴に関して、豊富な資料を与えてくれる⁴。この版は、リュトブフの56編の作品を、以下のように5つのジャンルに分類して提示している。すなわち、パリ大学神学部の教授ポストを巡る在俗聖職者の教授と托鉢修道会の争いを主題にした諷刺詩群「I. 教会、托鉢修道会、大学」、第7回、第8回十字軍において幽閉されたり戦死した貴人についての嘆きの詩を集めた「II. 十字軍」、社会の辺境で詩人＝芸人として生きる不幸な「私」を素材とした「III. 不幸に関する詩」、聖史劇「テオフィールの奇跡」や聖母の奇跡を描く物語を集めた「IV. 宗教詩」、ファブリオーなどの喜劇的な作品を集めた「V. 笑いの詩」である。

1989-90年にクラシック・ガルニエより出版されたザンクによる校訂は、ファラルとバスタンとは別の写本を底本として、作品の配列に関しても別の工夫をしている⁵。ザンクは、ファラルとバスタンによる年代推定を批判検討

³ Alain Corbellari, *La Voix des clercs. Littérature et savoir universitaire autour des dits du XIII^e siècle*, Genève : Droz, 2005, pp. 139-177.

⁴ Rutebeuf, *Œuvres complètes de Rutebeuf*, éd. É. Faral et J. Bastin, Picard, 2 vols, 1959-1960.

⁵ Rutebeuf, *Œuvres complètes*, éd. Michel Zink, Bordas - Classique Garnier, 2 vols, 1989-1990とその再版 Rutebeuf, *Œuvres complètes*, éd. Michel Zink, Le Livre de poche - Classique Garnier (Lettres gothiques), 2005. 以下、この再版に言及する際には、Rutebeuf (2005)と記す。

したデュフィユの研究⁶をさらに批判検討して、ジャンルを問わず、成立順と考えられる配列で作品を紹介した。さらにリュトブフのテキストには難解な箇所が多いが、対訳をつけている。

3. 「不幸に関する詩」と詩において仮構された「私」

3.1. リュトブフの「生涯」

ザンクの版から得られるリュトブフの詩人としての生涯は以下の通りである。シャンパーニュ地方から、おそらく学生としてパリに出てきたリュトブフは、パリ大学神学部における一連の事件において、ドミニコ会士、フランシスコ会士らの偽善を批判する諷刺詩を書く。その一方で、放浪学生のご他聞に漏れず、酒場に入出入りして、骰子賭博に興じて財産を一切切失う。さらに、あまりに率直に真実を語り人の悪口を言いすぎたためか、さまざまな不幸が彼を襲う。王は托鉢修道士たちの助言によって、宮廷を閉ざし、贅沢を禁じるので詩人たちは食いぶちを失う（「ルナールの変容」Renart le bestorné⁷）。貧困にあえぐ中、妻を娶るが（「リュトブフの結婚」Le Mariage Rutebeuf）、このことがさまざまな不幸を生むことになる（「リュトブフの嘆き」La Complainte Rutebeuf）。やがては、このようになったのもすべては他人の悪口を言ってきたせいだと反省し、聖母マリアへ神へのとりなしを祈る（「リュトブフの後悔」La Repentance Rutebeuf）。宗教的物語「エジプトのマリア」（La Vie de sainte Marie l'Égyptienne）、宗教劇「テオフィールの奇跡」（Le Miracle de Théophile）のように一度罪を犯した人間がマリアのとりなしによって救われるという作品を書き、また、十字軍へと人々を鼓舞し、戦死者を悼む詩を書いた。そこには、ルイ9世の弟アルフォンス・ド・ボワチエへの挽歌もあり、貴人をパトロンとしていたことが窺われる。また、職業詩人として、パトロンの求めに応じてファブリオーも書いた。しかしながら、晩年、フィリップ三世にあてた詩「リュトブフの貧困」（La Pauvreté de Rutebeuf）では、「パリにいて、あらゆる財宝に囲まれてはいますが、私の

⁶ Michel-Marie Dufeil, « L'Œuvre d'une vie rythmée : chronographie de Rutebeuf », in éd. Danielle Bushinger et André Crépin, *Musique, littérature et société au Moyen Âge. Actes du colloque, Université de Picardie, Centre d'études médiévales, 24-29 mars 1980*, Champion, 1980, pp. 279-294 (Id., *Saint Thomas et l'histoire*, Aix-en-Provence : Presses universitaires de Provence, 1991, pp. 671-687 に再録, <http://books.openedition.org/pup/4481> で参照可)。

⁷ 以下、リュトブフの作品の題名と引用は、Rutebeuf (2005)による。

ものは何もないのです。」(« A Paris sui entre touz biens, / Et n'i a nul qui i soit miens. », vv. 39-40) とパンも買うことができない窮状を訴えている。

以上に、リュトブフの作品から汲み取れる、詩人の人生に関わるらしい情報を紹介してみた。賭博であるとか、結婚であるとか、それらに由来する貧困であるとか、リュトブフの実人生らしく見えるものに関わってくるものは、すべて、ファラルとバスタンの校訂本においては「不幸に関する詩」に分類されているものから汲み取ったものである。

3.2. 仮構された「私」

しかし、すでに 1960 年代に、ナンシー=フリーマン・レガラドがイェール大学に提出した博士論文『リュトブフの詩の類型』の中で、中世の文芸において、伝記の対象となるのは聖人や王だけであり、詩人が自分の体験を語っている部分があっても、それは真実とは限らないし、たとえ真実であろうと、作品が意図するもののために持ち出されているのだということ指摘している⁸。

たとえば、リュトブフは、パリ大学神学部の在俗聖職者教授のリーダー、ギヨーム・ド・サンタムールの追放が決定的になった時期に書かれたとされている作品「ギヨーム・ド・サンタムールに関する物語詩」(Le Dit de Guillaume de Saint-Amour) で、托鉢修道士批判の詩の中で、自分のことを殉教をも顧みず真実を語る人として語っている。ところが、「不幸に関する詩」の作品群においては、おのれを結婚や賭博でしくじった愚か者として、その失敗を面白おかしく提示している。

3.2.1. 「リュトブフの結婚」と「リュトブフの嘆き」

作品の中にあられる「私」にまつわる出来事が、真実とは限らず、また、作者は必ずしもそれを聴衆に真実と思わせようとは意図していないだろうことは、少し詩句を分析すれば納得がいくことである。たとえば、「リュトブフの結婚」(Le Mariage Rutebeuf) と「リュトブフの嘆き」(La Complainte Rutebeuf) という 2 つの詩は、リュトブフが貧しく、若くもなく、美しくもない妻と結婚によって被った不幸を描いた作品で、続き物になっている。前者において妻は、「実は 50 歳さばをよんでいた」(« Cinquante anz a en son escuele, », v. 36) とあるが、後者においては、なぜかその妻が子ども出産し

⁸ Nancy Freeman Regalado, *Poetic Patterns of Rutebeuf: a study in noncourtly poetic modes of the thirteenth century*, New Haven and London: Yale University Press, 1970, pp. 255-311.

て、余計に家計が困窮する。年齢が誇張であることは明らかだが、子どもを生むという展開は、この誇張とあわせて、逆さまの世界、不可能事のトボス⁹を形成している。

「リュトブフの嘆き」では、妻の出産の後、次々に不幸が詩人を襲う。馬が柵に足をぶつけて骨折し（« Mes chevaux ot brizié la jambe / A une lice ; », vv. 54-55）—— 貧乏詩人が何のために馬を飼っているのだろうか？ —— 子供の乳母が報酬をふっかけてきて（vv. 56-59）、詩人は病気になり三ヶ月寝込むが、その間に妻がまた出産する。このような、不幸のオンパレードは、この詩人の「薬草売りの物語詩」（Le Dit de l'herberie）という作品を連想させる。香具師が、市場で人を集めて、薬草の来歴に関してあることないことを述べるというものである。

リュトブフは、詩人であると同時に、旅芸人でもあったであろうことが作品から読み取れるが、香具師と旅芸人とは、市の開かれる広場を共通の活動場所としていた。リュトブフも聴衆もがそういう風物に触れていたのは確かだろう。詩人と聴衆の間には、出来事のありえない連続を楽しんで聞くという文化があったはずである。

そのように考えると、「リュトブフの嘆き」において、「よく見えていた方の右目では、道を行くため進むために、ものが見えなくなった」（De l'ueil destre, dont miex veioie, / Ne voi ge pas aleir la voie / Ne moi conduire. », vv. 23-25）とあることも、「リュトブフの結婚」において、妻を娶ったことに関して、女を見る目がなかったという意味で、「私は少しも目が見えていなかったようだ。」（« Il pert bien que je ne vi gouste. », v. 125）と言っている箇所を受けてでてきたものかもしれない。すると、晩年の作品だとされる「リュトブフの平和」（La paix de Rutebeuf）の—— この作品は、それまで、食べるために人の悪口を歌ってきた人生を悔いるという内容なのだが —— 「まもなくほとんど目が見えなくなるが、神がこのことを罪の償いと考えてくれますように。」（« Dieu le m'atort a penitance / Que par tanz cuit que pou i voie ! », vv. 41-42）という詩句も、本当のことなのか怪しく見えてくる。

そもそも、「リュトブフの結婚」の冒頭には、「[12]60年、受難した御方が誕生した一週間後」（« .VIII. jors après la Nacion / Celui qui soffri passion, / En l'an sexante, », vv. 2-4）という詩句があり、結婚をした日とされているのだが、

⁹ E・R・クルツィウス、『ヨーロッパ文学とラテン中世』、みすず書房、1971、pp. 131-137、（南王路振一・岸本通夫・中村善也訳）の第5章「トボスとトボス論」の第7節「逆立ちした世界」を参照。

聖誕祭から一週間後、すなわち新年は、当時の教会暦によると愚者の祭りが行なわれていた期間にあたるのが、ミシェル・ルースによって指摘されている。この祝祭の期間にあたる聖誕祭（12月25日）から公現の祝日（1月6日）までは教会では結婚式が行なわれなかった。この解釈に従えば、二つの作品において描かれているリュトブフの結婚生活は、そもそもが絵空事である、ということになる¹⁰。

3.2.2. 「冬の骰子賭博」、「夏の骰子賭博」、「グレーヴ広場のごろつきたち」

また、リュトブフには、骰子賭博を巡る3つの作品がある。「冬の骰子賭博」（*La Griesche d'hiver*）と、「夏の骰子賭博」（*La Griesche d'été*）と、「グレーヴ広場のごろつきたち」（*Le Dit des ribauds de Grève*）である。どれもが、居酒屋の常連が骰子遊びに夢中になって無一文になる様子を描いている。これらの作品における「私」についても検討することにする。

「冬の骰子賭博」では、冒頭から75行目までは骰子の魅力にとりつかれて、身をもち崩す「私」の愚かさが自虐的に語られている。ここには次のような詩行が見られる。

神は私にほどよく季節を恵んで下さる。
夏には黒い蠅が私を刺し、
冬には白い蠅 [=雪] が私を刺す¹¹。
（リュトブフ「冬の骰子賭博」vv.31-33）

賭け金を作るため、服を質に出してしまっ、裸同然で過ごしている。夏は蠅が、冬は雪に苦しむというわけである。

ところが、作品の76行目以降は、骰子の誘惑に耳を貸す者は愚か者であるという一般論が、主語を三人称にして展開されている。従兄弟に頼っていけばこう言われるだろう、として、二人称の相手に対して次のような台詞が展開される。「毛織物屋でツケが効かないのなら、両替商に行って素寒貧だと言ってみろ、信用貸してもらえたらいいね。」（vv. 91-96の要約）先ほどまで、おのれの愚かさを自虐的に語っていた「私」が、いまや「彼」、また

¹⁰ Michel Rouse, « Le Mariage Rutebeuf et la fête des Fous », in *Le Moyen âge*, 88 (1982), pp. 435-449.

¹¹ Diex me fait le tens si a point, / Noire mouche en estei me point, / En yver blanche. (Rutebeuf, « La Griesche d'hiver », vv. 31-33.)

は、「おまえ」の愚かさをからかっている。ここでの「私」は「彼」、「おまえ」と交換可能な存在になっているということである。

その証拠に、「グレーヴ広場のごろつきたち」では、さきほど引用した「冬には白い蠅 —— つまり、雪 —— が私を刺し、夏には黒い蠅が私を刺す」という言葉の後半が、グレーヴ広場に集まるごろつきたちにあてはめて使われている。

おまえたち黒い蠅に刺されていたけれど、
今度は、白いのにさされるんだね¹²。
(リュトブフ「グレーヴ広場のごろつきたち」vv. 11-12)

「冬の骰子賭博」の「私」は「グレーヴ広場のごろつきたち」の「おまえたち」とも交換可能なのだということである。

以上には、レガラドが述べたリュトブフの詩における「私」の仮構性を、リュトブフの結婚にまつわる二つの詩、および、骰子賭博をめぐる三つの詩に焦点をあてて説明した。リュトブフの詩における「私」とは、増殖する「私」であり、交換可能な「私」であるということである。ここで考察を深めることはしないが、増殖する「私」、交換可能な「私」という詩における「私」のあり方は、1960年代以降の日本の現代詩、たとえば、鈴木志郎康の「プアプア詩」を連想させる。

走れプアプアよ
純粹もも色の足のうらをひるがえせ
今夜十一時森川商店の前を歩いていると
妻と私とプアプアの関係が今夜のテーマになった
妻は私ではなく私は妻であるプアプアでありプアプアは妻であり妻はプアプア
ではない
妻は靴を買いプアプアは靴をぬぎ妻は大陰唇小陰唇に錠を下してキョトキョト
キョトキョトキョトと大気を盗んで駆け込むのにプアプアは開かれたノート
ブックの白いパラパラ¹³
〔後略〕

¹² Les noires mouches vos ont point, / Or vos repoinderont les blanches. (Rutebeuf, « Le Dit des ribauds de Grève », vv. 11-12.)

¹³ 鈴木志郎康, 「続私小説的プアプア」, 『鈴木志郎康詩集』, 思潮社(現代詩文庫), 1969, p. 62.

リュトブフの作品には、時代、地域を越えた都市の詩に特有の表現がなりたっていた、ということも可能であろう。

3.3. ズムトールとザンク

レガラドが詩において仮構された「私」を言い出した背景には、1950年代後半からはじまるポール・ズムトールやロジェ・ドラゴネッティというジュネーヴ大学の研究者による、トルバドゥール、トルヴェールの叙情詩に関する研究の影響が大きいと考えられる。宮廷風の叙情詩における「私」は、至純の愛 (*fin'amor*) の価値体系を具現化した存在であり、歌とは、「大きな歌」 (*le grand chant*) の変奏曲である。そこにはロマン主義的な「個人」はありえないというのが彼らの主張だ。

レガラドの論文が発表された後、1975年にズムトールは、「歌における主語の「私」と、詩人の「私」¹⁴」という論文を発表して、トルヴェールのティボー・ド・シャンパーニュの宮廷風叙情詩と、リュトブフの「冬の骰子賭博」を比較している。

冬と夏の雨期を
分かつ季節に、
長く歌わなかった
つぐみが悶えている。
私は歌を歌おう。そのように
私が考えることは喜ばしいことだから。
私の中に入った愛の神が、
私にまっすぐ投げ槍を投げてきた。

いとしい人よ、あなたに
心の高貴さを見いだせなかった。
あなたをはじめて見つめるようになってから、
高貴さがあなたに身をおいたことはない。
あなたは私に対してあまりに尊大だけれど、
そのことがあなたを美しくしている。
測る尺度はないほどに、

¹⁴ Paul Zumthor, *Langue, texte, énigme*, Seuil, 1975, pp. 181-196 (« Le "je" de la chanson et le "moi" du poète »).

美しさがあなたに満ちている¹⁵。

(ティボー・ド・シャンパーニュ「第24歌」、vv. 1-16)

木の葉が落ち、
枝に地面に落ちない葉が
残っていない季節に、
貧困が私をうちのめし、
四方八方から私を攻撃してくる、
冬になり、
私の環境はおおいに変化した。
哀れな話をもとに、
残酷な詩を語りだそう。
貧しい分別と貧しい記憶力を、
栄光の王である神は私に与えた。
貧しい年金と共に。
寒風が冷たく尻に吹く、
風が私に吹く、吹きつける。
始終、
なんども、風を感じるのだ¹⁶。

(リュトブフ「冬の骰子賭博」vv. 1-16)

ティボーの宮廷風叙情詩では、春の訪れ、小鳥のさえずり、恋心の芽生え、恋する男の嘆き、といった伝統的なモチーフが、「私」を主語にして語られるが、述語は、「恋する」「怖れる」「恋の成就を乞う」といった抽象的なものであり、詩人が生きた現実が具体的に入りこむことはない。それに対して、リュトブフの作品では、春の訪れに対して冬の訪れ、恋の苦しみに対して貧困の苦しみ、というように、宮廷風叙情詩のモチーフを逆手にとった展開があった後に、ラテン詩カルミナ・ブラーナの骰子賭博のモチーフが持ち

¹⁵ Contre le tens qui devise / Yver et pluie d'esté, / Et la mauvis se debrise, / Qui de lonc tens n'a chanté, / Ferai chançon, car a gré / Me vient que j'ai enpensé. / Amors, qui en moi s'est mise, / Bien m'a droit son dart geté. // Douce dame, de franchise / N'ai je point en vous trouvé, / S'ele ne s'i est puis mise / Que je ne vous esgardé. / Trop avez vers moi fierté, / Mès ce fet vostre biauté, / Ou il n'a point de devise ; / Tant en i a grant plenté. (Thibaud de Champagne, « Chanson XXIV », vv. 1-16, Zumthor, *op. cit.*, p. 189 の引用より)

¹⁶ Contre tenz qu'aubres deffuelle, / Qu'il ne remaint en branche fuelle / Qui n'aut a terre, / Por povretei qui moi aterre, / Qui de toute part me muet guerre, / Contre l'yver, / Dont mout me sont changié li ver, / Mon dit commence trop diver / De povre estoire. / Povre sens et povre memoire / M'a Diex donei, li rois de gloire, / Et povre rente, / Et froit au cul grant byze vente : / Li vens me vient, li vens m'esvente / Et trop souvent / Plusors foïes sent le vent. (Rutebeuf, « La Griësche d'hiver », vv. 1-16.)

出される。作品における「私」は、主語ではなくて目的語の位置におかれて、貧困がもたらすさまざまな状況に翻弄される。

すなわち、宮廷風叙情詩にみられる「私」は、前提とされている価値体系の中に閉じ込められた普遍的抽象としての「私」である。それに対して、リュトブフの時期に出てくる「物語詩」(dit)、すなわち歌われるのではなく、朗読されることを前提とした作品においては、作品の「私」はもはや主語ではなく、さまざまに具体的な状況に翻弄される目的語となることが指摘されている。

物語詩の「私」にも、詩人の生きた現実が投影されているとは限らないことは、これまでにみてきた通りである。しかし、真実であろうとなかろうと、13世紀の都市に生じた、貧困の問題に直面する学生、あるいはそこから身をもち崩して社会における周辺的な存在になった詩人、旅芸人という類型の現実が反映されているといっても、間違いではないだろう。宮廷風抒情詩を歌うことは、このジャンルの「私」と一体化することだが、物語詩においては、同一的ではなく、旅芸人、貧乏詩人、賭博中毒者など、いわば、典型的な「私」が、作品の目的とするところにあわせて持ち出されるのだ。

ミシェル・ザンクは、1985年の『文学における主体性』の中で、ズムトールの論をとりあげて、物語詩は逸話的な打ち明け唄であるとして、そこに文学における主体の萌芽を指摘している¹⁷。2005年に出たレートル・ゴチック版のリュトブフ全集の解説では、リュトブフの「不幸に関する詩」は愚か者を題材とした教訓詩だとした上で、そのような愚か者が、あらゆるものを失いながら、最後に、神に対して憐れな私をお救い下さいと祈りの言葉をむけるのは、とるに足らない人の敬虔な気持ちを歌っているという意味で、宗教詩の伝統に属すると述べている¹⁸。

リュトブフの作品が教訓的であるとか、宗教的だということは、理解しづらいのだが、作品の上演のあり方を考えて、次のようなことだと考えている。本稿でとりあげている、詩人が自らの不幸を語る詩が聴衆にどのように伝わったかを想像してみよう。旅芸人の一行は、人が集まる広場でも、貴族や、有力な商人の館でも芸を披露していた。その中に混じって、リュトブフ、あるいは、リュトブフに扮した旅芸人は、おそらくは、宮廷風抒情詩の演奏の後にでも登場して、そこに出てくるモチーフを転覆させた、愚か者が被る不幸を面白おかしく朗唱する。町人が聴衆ならば、我が身と照らし合わせて詩

¹⁷ Michel Zink, *La Subjectivité littéraire*, Presses universitaires de France, 1985, pp. 47-74.

¹⁸ Id., « Introduction », in Rutebeuf (2005), pp. 27-33.

人の不幸を笑い、こうはならないぞ、と思うことだろう。聴き手に財産があれば、自分のために道化を演じてくれる詩人のために、財布の紐も緩くなったことだろう。そして、時にグロテスクな高まりまで嵩じた不幸のオンパレードが、一見素朴な神への祈りで締めくくられることに安心させられたのではないだろうか。

もちろん、以上のような想像は冒険である。そもそも、当時の旅芸人の社会的なあり方については、会計資料、法・行政資料を使った実証的な研究もあるものの¹⁹、文学作品の上演のされ方については、ファラルの研究のように、文学作品の中に出てくる上演の場面からの類推に頼る他はない²⁰。そして、上のような想像を正当化してくれるテキストに我々はまだ出会っていないのである。

4. 類型的な「私」がみたパリ

4.1. リュトブフの作品におけるパリ

では、リュトブフの類型的な「私」によるパリは、どのように作品にたちあられるのだろうか？ 作品の中に、地名が示される例はあまりない。骰子賭博を描いた三つの作品の中で、「グレーヴ広場のごろつきども」では、船の荷下ろし人夫の集まってくる現在パリ市役所があるグレーヴ広場を舞台にしている。また、「冬の骰子賭博」の一節では、シテ島の中心に面した毛織物街から、両替商が集まっていたシャンジュ橋の一角が登場する。さらに、托鉢修道会と在俗聖職者の間の軋轢を、後者の立場から書いた「パリの修道院」(Les Ordres de Paris)という詩では、ドミニコ会、フランシスコ会などの新興の修道会を11あげて、城壁の中にあるものから時計回りに論難をあげていく。その程度である。50編以上ある作品の中でわずかにこれだけしか例を拾えないということは、アラン・コルベラーリも指摘するように、総じていえば、リュトブフにはパリの地理への関心は希薄だったようだ²¹。

一方で、特にファラルとバスタンの校訂本で「不幸に関する詩」に分類されている作品には、当時の都市問題が数多く現れる。上に検討した結婚を扱う二つの詩、また、骰子賭博に関する三部作は、貧困層による居酒屋での蕩尽と、そこで繰り広げられる賭博とは、当時の都市問題であり、ルイ九世に

¹⁹ 上尾信也、『楽土論序説』、国際基督教大学比較文化研究会、1995。

²⁰ Édmond Faral, *Les Jongleurs en France au Moyen âge*, Champion, 1964 (réimpr. en 1987).

²¹ Alain Corbellari, *op. cit.*, pp. 161-172.

より賭博の禁止令も出された。都市における貧困に関しては、王公をパトロンにしていた筈の晩年のリュトブフが、「パリにいて、あらゆる財宝に囲まれてはいますが、私のものは何もないのです²²。」という「リュトブフの貧困」の詩句が深い印象を与えてくれる。

また、托鉢修道士を巡る一連の作品では、修道士たちが都市の新たな魂の救い手として、商人の聴罪師として家庭に入り込み、それまで在俗教会が受けていた寄進をわがものとしていく様子が描かれている。托鉢修道士たちが王の宮廷にも入り込む様子は、「ルナールの変容」(Renart le bestourné)において語られている。以上については、アルマン・ストリュベルによる論文²³に簡潔にまとめられている。

4.2. 「世界の傷」と「パリ大学についての物語詩」

我々は、具体的に、田舎からパリに出てきた学生というテーマをとりあげて、作品における「私」の視点によって、同じ題材であっても、評価のされ方が変わってくるという例を検討することにする。

リュトブフは、残されている作品から、もともとはシャンパーニュ地方からパリに学びにきた学生だったと推測されている。「世界の傷」(Les Plaies du monde)という作品では、俗人、学僧、騎士という三つの身分がそれぞれ傷を負って腐敗している様子が描かれている。この作品には、聖職者への批判がありながら、托鉢修道士への批判がなされていないことから、リュトブフが托鉢修道会と在俗聖職者の間の党派的な争いに巻き込まれる前の作品ではないかとされている。

正しい学生たちは、明らかに
担ぎ人夫よりも苦勞をしている。
知らない土地に行くと、
評価と名誉を追い求め、
また、我が身と心に誉れを与えようとしてのことなのに、
男も女も、誰も彼らのことなど心にとめない。
仕送りをするにしても、ほんの少しのことで、
学生達は、天国の使徒の中では
聖パウロのことを一番よく思い出す²⁴。
だって、マール金貨やマール銀貨を

²² Rutebeuf, « La pauvreté de Rutebeuf », vv. 39-40.

²³ Armand Strubel, *op. cit.*

²⁴ Saint Paul の別綴りである Saint Pou の Pou を peu の意味にとった地口である。

10 個単位で持っていることはまったくないのだから。
見知らぬ土地の人々の好きにされているのだ²⁵。
(リュトブフ「世界の傷」vv. 89-100)

学生が、学問において「評価と名誉を」得ようという理想に燃えながら、貧困や、匿名的な都市の空間における孤独に苦しむ様子を同情的な視点から描いている。その後の作品のことを思えば、素朴な視点であり、もしかしたら、詩人自身の像が素直に反映されているのかもしれない、と思わされる。

リュトブフはこの後、在俗聖職者グループと托鉢修道会とのパリ大学神学部の教授ポストを巡る紛争から、ギヨーム・ド・サンタムールの追放に至る経緯を巡る作品を 1254 年頃から 1263 年頃にしきりに書いている。その後しばらくブランクがあって、1268 年に再び二つの党派間の争いが激化して、学生同士での乱暴沙汰が起こった時期に書かれたとされている「パリ大学についての物語詩」(Le Dit de l'Université de Paris) でも、田舎から出てきた学生が描かれている。「世界の傷」に出てきた学生のその後、といったものである。

貧乏百姓の息子が
パリに勉学のために来るだろう。
父親は 1 アルパン、2 アルパンの土地から
手に入れることができるだけのものを
評価と名誉を追い求めて
すべて息子に与えるだろう。
それで自分は破算だ。
息子はパリに来る、
やらなくてはと思っていることを行うために、
正しい人生を歩むために。
ところが、預言²⁶はあべこべになってしまう。
鋤と耕作から得られたものを
武器に変えてしまうのだ。
道ごとできろきよろとして
美しい浮かれ女を見つけようとする。

²⁵ Tout pleinement droit escolier / Ont plus de poinne que colier. / Quant il sont en estrange terre / Por pris et por honeur conquerre / Et por honoreir cors et ame, / Si ne sovient home ne fame. / S'om lor envoie, c'est trop pou. / Il lor sovient plus de saint Pou / Que d'apostre de paradix, / Car il n'ont mie dix et dix / Les mars d'or ne les mars d'argent. / En dongier sunt d'estrange gent. (Rutebeuf, « Les Plaies du monde », vv. 89-100. 下線は筆者による。)

²⁶ 「剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする」(『イザヤ書』2 章 4-5 節)

あちこちを見渡して、あちこちで立ち止まる。
お金がなくなり、服がすり切れる。
ぜんぶ、やり直さないと。
ここに種をまいてもしかたがない。
四旬節には、神が喜ぶことを
しなくてはいけないのに、
ぼろ切れの代わりに鎖帷子を着て
酒を飲んだあげくに殴りあいだ。
3人とか4人の学生が
400人の学生に喧嘩をさせて、
大学を休講においこむ²⁷。
(リュトブフ「パリ大学についての物語詩」vv. 14-39)

「評価と名誉を追い求めて」(Por pris et por honeur conquerre)という詩句も、それに前後する箇所描かれている、パリにでて学問を修めようという向上心も前の作品に共通している。ところが、この作品の「私」は、『イザヤ書』の「剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする」という預言を持ち出して、学生たちが農民の出自であることを揶揄するのだ。この作品の「私」は、自分がどちらの陣営であるかを明言していないが、リュトブフが大学紛争を描く際、その党派性は明かである。托鉢修道士の生徒となるものを、百姓の出だと言って揶揄しているのだ。百姓が名誉と評価を求めて高い身分を目指すというのは、中世的な価値観から言えば、「高慢」という悪徳である。「謙譲」の仮面を被った修道士たちが、「高慢」の輩を引き連れているという批判がここに成り立っている。

いわば素朴に学生の苦勞に同情をしていた「私」が、党派性を強め、托鉢修道士のあり方にものを申す「私」という類型を獲得し、その立場から、かつての自分の言葉でもって、敵対する派閥に属する学生を切りつけていると

²⁷ Li filz d'un povre paisant / Vanra a Paris por apanre ; / Quanque ces peres porra panrre / En un arpant ou .II. de terre / Por pris et por honeur conquerre / Baillera trestout a son fil, / Et il en remaint a escil. / Quant il est a Paris venuz / Por faire a quoi il est tenuz / Et por mener honeste vie, / Si bestorme la prophecie : / Gaaig de soc et d'areüre / Nos convertit en armeüre. / Par chacune rue regarde / Ou voie la bele musarde ; / Partout regarde, partout muze ; / Ces argenz faut et sa robe uze : / Or est tout au recoumancier. / Ne fait or boen ci semancier. / En Quaresme, que hon doit faire / Choze qui a Dieu doie plaire, / En leu de haies haubers vestent / Et boivent tant que il s'entestent ; / Si font bien li troi ou li quatre / Quatre cens escoliers combatre / Et cesseir l'Universitei : (Rutebeuf, « Le Dit de l'Université de Paris », vv. 14-39. 下線は筆者による。)

いうわけだ。このような詩人の変化にも、パリという都市のあり方が反映しているのではないだろうか？